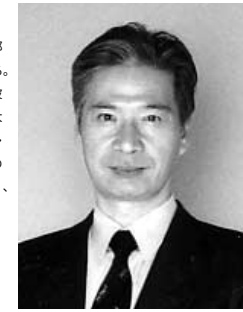
秋月禅学と私（3）

―「空」とは「自他不二」―

竹村　牧男

竹村　牧男 / たけむら・まきお
1948年、東京生まれ。71年、東京大学文学部卒業。学生時代より秋月龍珉老師に参禅する。文化庁宗務課専門職員、三重大学助教授、筑波大学助教授、同大学教授を経て、現在、東洋大学文学部教授。筑波大学名誉教授。居士号・祖珉。著書に、『唯識三性説の研究』、『唯識の探求』、『親鸞と一遍』、『良寛さまと読む法華経』、『西田幾多郎と仏教』など多数。



仏教の根本真理として、縁起もしくは空が考えられよう。縁起は、相依性のことでもある。あるものがそれ自身によって存在することができず、他を待ってはじめて存在していることを表しており、そのものにそれ自身の自体、本体がないことになる。そこを仏教は無自性とも呼んだ。その無自性がまた、空ということである。したがって、縁起と空とは同じこととなる。古来、「縁起の故に無自性であり、無自性の故に空である」と言われてきた。

空とはそのように、あるものにその自体、本体がないことである。それは無ということとは異なる。自体・本体がない仕方で、そのものは有るからである。つまり実体的存在としてはないが、現象としては存在している、それが空ということの意味になる。だから『般若心経』にも、「色即是空・空即是色」と謳われたのである。

色とは世界を構成している5つの物質的・心理的要素、すなわち五蘊（＊1）の代表で、物質的な要素を意味する。小乗仏教では五蘊無我と、五蘊はあるけれども、我というものはないとした。大乗仏教では、その五蘊そのものも無自性・空として、「色即是空・空即是色」と唱えたのであった。ちなみに、我の空を悟ると、生死輪廻を脱して涅槃に入る。法（世界の構成要素）の空を悟ると迷いを脱して菩提を実現する。大乗仏教は、我法二空を悟って菩提と涅槃とを実現しようとするのであり、そのとき、涅槃は無住処涅槃となって生死のただ中に涅槃を見出すことになるのである。菩提のはたらきにより、生死のただ中に身をおきつつ人々を救済する活動をしてやまない、それが大乗菩薩の理想であった。

仏教の教理を説明すると、概略以上のようであるが、禅はそんな思想的な議論をひねくりまわさない。端的に「色即是空・空即是色」をつかむ。そして為人度生に励むのである。

龍珉の処女作『公案 ― 実践的禅入門』は、次のような面白い話から始まっている。

玄節禅士という教相（＊2）に秀でた雲水がいた。玄節は先輩の弘森禅士に、あるとき、「禅には如来禅と祖師禅ということがあるそうだ。どう違うのか話してくれないか」ときりだした（如来禅はインドの禅、祖師禅は中国で育まれた禅）。弘森は「話してやらぬこともないが、その代わりに貴公一つ得意の教相で、わしに『般若心経』の講義をしてくれぬか」と言った。「よろしい」ということになって、その日か次の日か、いよいよ玄節自慢の講義が始まった。経題から始めて、だんだん講義が進んで、「色即是空・空即是色」というところまでくると、それまで黙って聞いていた弘森が、「ちょっと待ってくれ」と言い出した。夏のことで、玄節はウチワを使いながら話をしていたらしいのだが、弘森はいきなりそのウチワを指して、「貴公の持っているそのウチワは色か空か」と聞く。むろん玄節は即座に「色（物質）だ」と答える。そうすると、弘森は右手をぐっと突き出して、「よろしい、色はもらった。今度は空の方をよこせ」と言う。これには玄節もぐっとつまった。学問としての仏法はいくらすっかり頭につめこんだつもりでも、禅でいう悟り、すなわち心の眼がまだほんとうに開けていなかったので、「空をよこせ」などと言われるともうどうしようもない。このとき弘森はとどめをさして言った、「これが祖師禅だ」。

よく小乗仏教は析空観だという。「引き寄せて結べば柴の庵かな解くれば元の野原なりけり」である。しかし大乗仏教は体空観だという。「引き寄せて結べば柴の庵かな解けねど元の野原なりけり」である。玄節禅士もすぐさま、「ウチワ以外にまだ空をほしがるのか」とでも言って弘森禅士の口をふさいだならば、大乗仏教ばかりか祖師禅にもかなったことであろう。

ところが、龍珉の空の説明は、色がそのまま空だというのとも、またもう一つ違っていた。たとえば、「自己がないときすべてが自己だ」、これが空ということだというのである。空を対象的に、実体的存在ではないこと、などと見ていない。座布団上で坐禅しぬいて自我を空じきったところを、空と見ているのである。まさに禅的な空の把握である。もちろんインド仏教の空の思想の背景には、その空観の禅定と智慧とがあるであろう。しかし教説としてまとめられていく中で、その根本は忘れられてしまう。龍珉はその根本に取って返したということができる。禅定に入って、対象的分別を掃討して、真如そのものを見たとき、自己がなければすべてが自己だとの悟りを得る。空とはそのことだというのである。

龍珉は満50歳のとき、山田無文老師を本師として出家得度した。門弟を公案で育成するためには授戒も必要となる、それには出家の身分でなければならないと考えたからである。その山田無文老師は、釈尊が暁の明星を見て悟ったとき、「『あ、自分が光っている!』と叫んだに違いない」と言った。龍珉はこの言葉を好んでよく引いた。

秋月　龍珉 / あきづき・りょうみん

1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒。同大学院修了。
宮田東珉老師、古川堯道老師、苧坂光龍老師、大森曹玄老師に参禅。
埼玉医科大学教授、花園大学教授などを歴任。 埼玉医科大学名誉教授。 臨済正宗真人会師家として門弟を多数養成。月刊誌『大乗禅』主幹を長らく務める。 禅道と禅学とを究め、さらに仏教学・宗教哲学の分野にも活躍した。 宗教間対話の促進に努め、晩年は海外の国際集会などにも積極的に参加した。**1999**年、**9**月示寂。
著書に『秋月龍珉著作集』全**15**巻、『道元入門』『公案―実践的禅入門』『新大乗―仏教のポスト・モダン』『禅とイエス・キリスト』（対談集）『世界の禅者―鈴木大拙の生涯』『誤解だらけの仏教』『現代（ポスト・モダン）を生きる仏教』『無心と神の国』（対談集）『絶対無と場所―鈴木禅学と西田哲学』など多数。

（右）秋月龍珉老師

あのはるか遠くに光る一点の星も、自己そのものであるという。ここからも、空は自他不二ということが知られよう。こうして、龍珉にとって空は自我を空じた境地のことであり、そこでは、物我一如、自他不二が自覚されるのであった。空はどこにあるかと問われて、ただウチワをあおぐのとも異なる、空の禅的了解であった。

ところで、龍珉には『一日一禅』（＊3）という著作もあるが、その267「南山に雲起これば、北山に雨（ふ）る」（雲門が自ら出した問いに自ら代わって答えた句）に、次のような解説を書いている。「さて、南山の雲と北山の雨とは不二である。それを空というのだ。『空』とは『自他不二』である。平等即差別である。したがって差別即差別である。個物（微塵）と個物（微塵）とが相即相入する『事事無礙法界（ほっかい）』（個と個とが円融交差して互（たがま）に礙げない自他不二の境地の世界）がそこにある」。自他の区別も空ぜられたとき、すべては一体化する。自己と明星と不二であるし、明星と月とも不二となる。今はそこをも視野に入れつつ、空すなわち自他不二から華厳（けごん）の事事無礙法界へとつなげている。前に「縁起の故に無自性・空」ということを言ったが、ここでは空の故に重重無尽の縁起へとよみがえっているのであり、それは見事な解説だと思う。

しかし興味深いのはこれだけではない。そのあとに次の言葉が付されていることを見逃すわけにはいかない。「ところで、私はこの雲門の代語を『張公茶（ちょうこうちゃ）を喫（きつ）して李公覚（りこうさ）む』と代えたい。皆さん、筆者の意図を見抜けますか」。

読者にこう言って質問を呈しているが、龍珉は老婆親切である。ちゃんとその答えを同書中の300「酒肆魚行（しゅしぎょこう）、化して成仏せしむべし」の解説の中に明かしている。この「酒肆魚行、化して成仏せしむべし」の句は、『十牛図』の第十、「入鄽垂手（にってんすいしゅ）」に出るものである。周知のように、『十牛図』は、牧童が牛に託せられた真実の自己を尋ねて、やがてそれを入手し、自由に乗りまわし、自己を真に実現する道筋を、十枚の絵で表したものである。言うまでもなく、第十、入鄽垂手は、最後の境界、修行が完成したところである。しかしてそれは光輝く仏様としてではなく、和光同塵する布袋（ほてい）において描かれている。そこを表す先の句は、街にでかけ、居酒屋などに行って、みんなを成仏させるという大乗菩薩の慈悲行を表すものである。

これについて龍珉は、「『空』とは『自他不二』である。真の悟りとは自己の身心・他己の身心を脱落させる働きでなければならない」と言い、さらに次のように言う。

私がさきに雲門の「古仏と露柱と相い交わる、是れ第幾機ぞ」という問いに対する雲門自身の「南山に雲起これば、北山に雨ふる」という答えを未穏在として、「張公茶を喫して李公覚む」という語に代えたいといったのは、ここである。従来の禅では相い交わる対象がどうも自然に傾きすぎて、「私と汝」という人間対人間のところで「自他不二」の境涯を練る訓練がたりなかったと思うのである。

つまりこれまでの禅者は、悟りを開いて山水と一体となることを愛（め）ではしたものの、他者と一体の境地を生きることには、必ずしも積極的ではなかった、禅に社会性というものが不足していた、と批判しているのである。禅の境涯はいかにも高雅・幽遠かもしれない。しかしともすれば出世間性・非社会性に閉ざされがちである。しかし禅も大乗仏教である。それに真に自他不二を自覚したなら、おのずから他者の悲しみ・苦しみが自己のそれとなり、他者のためになんとか働こうとするはずであろう。本来の禅は、十字街頭にあってしかもことさらにでなく、ひそかに苦しみのたうちまわる他者のために働くのである。龍珉はそこを強く主張するのであった。

空を自他不二と言い換えるのは、龍珉の識見であり、しかもその不二を物我一如によりも主体同士の呼応に主眼をおいて見ようとしたのは龍珉の卓見である。そこには、龍珉の修した公案体系の教示もあろうが、大拙の悲心重視の思想、そして寸心（西田幾多郎）の「個は個に対して個である」の思想があった。はたして、今後、禅の中から、マザー・テレサのような宗教者が出るであろうか。今、自他不二の悟りが禅に問われているであろう。

なお、張公云々の句は、普通は「張公酒を喫して李公酔う」である。龍珉は、ほぼ一滴も酒の飲めない体質の人だった。

（＊**1**）個体もしくは世界を構成する物質的・心理的の**5**つの要素のこと。
色〔物質〕・受〔感情〕・想〔認知〕・行〔意志〕・識〔知性〕
（＊**2**）言葉で組み立てられた、広汎な仏教の教理の内容のこと。
（＊**3**）講談社学術文庫より今年**5**月刊行